

琵琶伝

泉鏡花

青空文庫

新婦が、床杯をなさんとて、座敷より休息の室に開きける時、介添の婦人はふとその顔を見て驚きぬ。

面貌ほとんど生色なく、今にも僵れんずばかりなるが、ものに激したる状なるにぞ、

介添は心許なげに、つい居て着換を捧げながら、

「もし、御気分でもお悪いのじやございませんか。」

と声を密めてそと問いぬ。

新婦は凄冷なる瞳を転じて、介添を顧みつ。

「何。」

とばかり簡単に言捨てたるまま、身さえ眼をさえ動かさで、一心ただ思うことあるその一方を見詰めつつ、衣を換うるも、帯を緊むるも、衣紋を直すも、襟を揃うるも、皆他の手に打任せつ。

尋常ならぬ新婦の気色を危みたる介添の、何かは知らずおどおどしながら、

「こちらへ。」

と謂うに任せ、渠は少しも躊躇わで、静々と歩を廊下に運びて、やがて寢室に伴われぬ。床にはハヤ良人ありて、新婦の来るを待ちおれり。渠は名を近藤重隆と謂う陸軍の尉官なり。式は別に謂わざるべし、媒妁の妻退き、介添の婦人皆罷出つ。

ただ二人、閨の上に相對し、新婦は屹と身体を固めて、端然として坐したるまま、まおもてに良人の面を瞻りて、打解けたる状毫もなく、はた恥らえる風情も無かりき。

尉官は腕を拱きて、こもまた和ぎたる体あらず、ほとんど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せしが、遂に良人まず肅びたる声にて、

「お通。」

とばかり呼懸けつ。

新婦の名はお通ならむ。

呼ばるるに応えて、

「はい。」

とのみ。渠は判然ともものいえり。

尉官は太く苛立つ胸を、強いて落着けたらんごとき、沈める、力ある音調もて、

「おまえ、よく娶たな。」

お通は少しも口籠らで、

「どうも仕方がございません。」

尉官はしばらく黙しけるが、ややその声を高うせり。

「おい、謙三郎はどうした。」

「息災で居ります。」

「よく、おまえ、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「なぜ、詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせて、懐中に手を差入れて一通の書を取り出し、良人の前に繰広げて、

両手を膝に正してき。尉官は右手を差し伸し、身近に行燈を引寄せつつ、眼を定めて読

みおろしぬ。

文字は蓋し左のごときものにてありし。

お通に申残し参らせ候、御身と近藤重隆殿とは許婚に有之候

然るに御身は殊の外彼の人を忌嫌い候様子、拙者の眼に相見え候えば、女ながらも

其由そのよしのいい聞け難くて、臨終いまわの際まで黙し候
さ候えども、一旦親戚の儀を約束いたし候えば、義理堅かりし重隆殿の先人に対し
面目なく、今さらへんがえ変替相成らず候あわれ犠牲いけにえとなりて拙者の名のために彼の人
に身を任せ申さるべく、斯この遺言を認め候時の拙者が心中の苦痛を以て、御身に謝
罪いたし候

月 日

清川通知みちとも

お通殿

二度三度繰返して、尉官は容かたちあらたを更めたり。

「通、吾われは良人だぞ。」

お通は聞きて両手を支つかえぬ。

「はい、貴下あなたの妻でございます。」

その時尉官は傲然ごうぜんとして俯向うつむけるお通を瞰下みおろしつつ、

「吾のいうことには、汝おまえ、きつと従うであろうな。」

此方こなたは頭こうべを低たれたるまま、

「いえ、お従わせなさらなければ不可いけません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、妻たる節操は守ろうな。」

お通は屹ぎつと面を上げつ、

「いいえ、出来さえすれば破ります。」

尉官は怒気心頭を衝つきて烈火のごとく、

「何だ！」

とその言を再びせしめつ。お通は怯おめず、臆おくする色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねばなりませんという、そんな、義理はございませんか

ら、出来さえすれば破ります！」

恐おそれ気もなく言放てる、片頬うなじに微笑えみを含みたり。

尉官は直うなじちに頷うなずきぬ。胸中あらかじ予めこの算ありけむ、熱の極は冷となりて、ものいいもいと

静しずかに、

「うむ、きつと節操を守らせるぞ。」

渠は唇しんとう頭に嘲ちようしやう笑したりき。

二

本謙三郎はただ一人清川の書齋に在り。当所もなく室の一方を見詰めたるまま、黙然として物思えり。渠が書齋の椽前には、一個数寄を尽したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる鸚鵡あり、餌を啄むにも飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後姿を見遣りつつ、頭を左右に傾けおれり。一室寂たることしばしなりし、謙三郎はその清秀なる面に鸚鵡を見向きて、太く物案ずる状なりしが、憂うることく、危むごとく、はた人に憚ることあるもののごとく、「琵琶。」と一声、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵡の名ならむ。低く口笛を鳴すとひとしく、

「ツウチヤン、ツウチヤン。」

と叫べる声、奥深きこの書齋を徹して、一種の音調打響くに、謙三郎は愁然として、思わず涙を催しぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養われつ。お通と渠が従兄なる謙三郎との間に処して、巧みにその情交を暖めたりき。他なし、お通がこの家の愛娘として、室を隔てながら家を整したりし頃、いまだ近藤に嫁がぎりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えんと欲

することあるごとに、今しも渠がなしたるごとく、籠の中なる琵琶を呼びて、しかく口笛を鳴すとともに、琵琶が玲瓏たる声をもて、「ツウチャン、ツウチャン。」と伝令すべく、よく馴らされてありしかば、この時のごとく声を揚げて二たび三たび呼ぶとともに、帳内深き処肅として物を縫う女、物差を棄て、針を措きて、ただちに謙三郎に來りつつ、笑顔を合すが例なりしなり。

今やなし。あらぬを知りつつ謙三郎は、日に幾回、夜に幾回、果敢なきこの児戯を繰返すことを禁じ得ざりき。

さてその頃は、征清の出師ありし頃、折はあたかも予備後備に対する召集令の発表されし折なりし。

謙三郎もまた我國徴兵の令に因りて、予備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度聯隊に入營せしが、その月その日の翌日は、旅団戦地に発するとて、親戚父兄の心を察し、一日の出營を許されたるにぞ、渠は父母無き孤兒の、他に繋累としてはあらざれども、兒として幼少より養育されて、母とも思う叔母に会して、永き離別を惜まなれど、朝来ここに來りおり、聞くこともはた謂うことも、永き夏の日に尽きざるに、帰營の時刻迫りたれば、謙三郎は、ひしひしと、戎衣を装い、まさに辞し去らんとし、躊躇

躊しつ。

書齋に品あり、衣兜に容るるを忘れたりとて既に玄関まで出でたる身の、一人書齋に引返しつ。

叔母とその奴婢の輩は、皆玄関に立併びて、いずれも面に愁色あり。弾丸の中に行く人の、今にも来ると待ちけるが、五分を過ぎ、十分を経て、なお書齋より来らざるにぞ、謙三郎はいかにせしと、心々に思える折から、寂として広き家の、遥奥の方よりおとずれきて、

「ツウチャン、ツウチャン。」

と鸚鵡の声、聞き馴れたる叔母のこの時のみ何思ひけん色をかえて、急がわしく書齋に到れり。

謙三郎は琵琶に命じて、お通の名をば呼ばしめしが、来るべき人のあらざるに、いつもの事とはいいながら、あすは戦地に赴く身の、再び見、再び聞き得べき声にあらねば、意を決したる首途にも、渠はそぞろに涙ぐみぬ。

時に椽側に磴音あり。女々しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方に来りて、突然鳥籠の蓋を開けつ。

驚き見る間に羽ばたき高く、琵琶は籠ろうちゆう中を逸し去れり。

「おや！ 何をなさいます。」

と謙三郎はせわしく問いたり。叔母は此方こなたを見も返らで、琵琶の行方を瞻みまもりつつ、椽側ひぐらしに立ちたるが、あわれ消残る樹間このまの雪か、緑りよくすい翠すい暗あきあたり白しろき鸚鵡ひぐらしの見え隠れに、蝸か一声鳴きける時、手をもつて涙を拭ぬぐいつつ徐しずかに謙三郎を顧みたり。

「いいえね、未練が出ちやあ悪いから、もうあの声を聞くまいと思つて。……」

叔母は涙の声を飲みぬ。

謙三郎は羞はじたる色あり。これが答はなさずして、胸の間の釦鈕ボタンを懸けつ。

「さようなら参ります。」

とつかつかと書齋を出いでぬ。叔母は引添うごとくにして、その左側に従いつつ、歩みながら口早に、

「可いいかい、先刻さつき謂つたことは違えやしまいね。」

「何ですか。お通さんに逢つて行ゆけとおっしゃった、あのことですか。」

謙三郎は立たちどま留りぬ。

「ああ、そのこととも、お前、軍いくさに行くという人に他ほかに願ねがいがあるものかね。」

「それは困りましたな。あすこまでは五里あります。今朝だと腕車くろまで駈かけて行つたんです
が、とても逢わせないといえますから行こうという気もありませんでした。今ツからじゃ、
もう時間がございませぬ。三十分間、兵営までさえ大急おおいそぎでございます。飛んだ長座を
いたしました。」

謂うことを聞きも果てず、叔母は少しく急せき込みて、

「その言ことは聞いたけれど、女むすめの身にもなつて御覧、あんな田舎へ推おしこ込まれて、一年越こし外出
も出来ず、折があつたらお前に逢いたい一心で、細々命つなを繋いでいるもの、顔も見せない
で行かれちやあ、それこそ彼女あのこは死んでしまふよ。お前もあんまり察さしが無い。」

と戎衣じゆういを捉とらえて放たざるに、謙三郎は困こづじつつ、

「そうおつしやるも無理ではございませぬが、もう今から逢いますには、脱營だつえいしなければ
なりません。」

「は、脱營でも何でもおし。通が私や可哀そうだから、よう、後生だから。」

と片手に戎衣の袖を捉えて、片手に拝むに身もよもあらず、謙三郎は蒼あおくなりて、

「何、私の身はどうなろうと、名誉も何も構かまいませんが、それでは、それではどうも国民
たる義務が欠けますから。」

と誠心籠めたる強き声音も、いかでか叔母の耳に入るべき。ひたすら頭を打掉りて、
 「何が欠けようとも構わないよ。何が何でも可いんだから、これたった一目、後生だ。頼
 む。逢つて行つてやつておくれ。」

「でもそれだけは。」

謙三郎のなお辞するに、果は怒りて血相かえ、

「ええ、どういつても肯かないのか。私一人だから可いと思つて、伯父さんがおいでの時
 なら、そんなこと、いわれやしまいが。え、お前、いつも口癖のように何とおいいだ。き
 つと養育された恩を返しますツて、立派な口をきく癖に。私がこれほど頼むものを、それ
 じゃあ義理が済むまいが。あんまりだ、あんまりだ。」

謙三郎はいかんと弁疏なすべき言を知らず、しばし沈思して頭を低れしが、叔母の
 背をば搔無でつつ、

「可うございます。何とでもいたしてきつと逢つて参りましょう。」

謂われて叔母は振仰向き、さも嬉しげに見えたるが、謙三郎の顔の色の尋常ならざる
 を危みて、

「お前、可いのかい。何ともありやしないかね。」

「いや、お憂慮きづかいには及びません。」
「いと淋ほほえしげに微笑みぬ。」

三

「奥様これ、どこへござらっしゃる。」

と不意うしろに背後より呼留められ、人は知らずと忍び出でて、今しもようやく戸口に到いたれる、お通はハツと吐胸とむねをつきぬ。

されども渠かれは聞かざる真似して、手早く鎖じょうを外さんとなしける時、手燭てしよく片手に駈出かけいでて、むずと帯際を引ひ捉とらえ、掴つか戻もどせる老人あり。

頭髮かみあたかも銀のごとく、額ひ兀げげて、髻ひげまだらに、いと厳いかめしき面つら構がまえの一癖あるべく見えけるが、のぶとき声にてお通を呵しかり、「夜夜よなか中あてこともねえ駄目なこつた、断あきら念めさつせい。三原伝内が眼張がんばつてれば、びくともさせることちやあねえ。眼くを眩くらまそうとつてそりや駄目だ。何の戸外おもてへ出すものか。こつちへござれ。ええ、こつちへござれと謂いうに。」

お通は屹ぎつと振返り、

「お放し、私がちよつと戸外おもてへ出ようとすることを、何のお前がお構いでない、お放しよ、ええ！ お放してば。」

「なりましねえ。麻畑の中へ行つて逢おうたつて、そうは行ゆかねえ。素直にこつちへござれツていに。」

お通は肩を動かしぬ。

「お前、主人をどうするんだえ。ちつと出過ぎやしないかね。」

「主人も糸瓜へちまもあるものか、吾おれは、何でも重隆様のいいつけ通りにきつと勤めりやそれで可いいのだ。お前めえさま様が何と謂つたつて耳にも入れるものじゃねえ。」

「邪じやくん険も大抵にするものだよ。お前あんまりじゃないかね。」

とお通は黒く艶つやかな瞳をもつて老夫の顔をじろりと見たり。伝内はビクともせず、

「邪いんごう険でも因業いんごうでも、吾、何にも構わねえだ。旦那様のおっしゃる通りきつと勤めりやそれで可いいのだ。」

威をもつて制することならずと見たる、お通は少しく気色を和らげ、

「しかしねえ、お前、そこには人情というものがあるわね。まあ、考えてみておくれ。一お

昨日の晩はじめて門をお敲たたきなすつてから、今夜でちょうど三晩の間、むこうの麻畑の中に隠れておいでなすつて、めしあがるものといつちや、一粒の御飯もなし、内に居てさえひどいものを、ま、蚊かや蝨ぶよでどんなだろうねえ。脱宮をなすつたつて。もう、お前も知つてる通り、今朝ツからどの位、おしらべが来たか知れないもの、おつかまりなさりやそれツきりじやあないか。何の、ちよつとぐらい顔を見せたからつて、見たからつて、お前、この夜中だもの、ね、お前この夜中だもの、旦那に知れツこはありやしないよ。でもそれでも料簡りょうけんがならなけりやお前でも可い、お前でも可いからね、実はあの隠れ忍んで、ようよう拵こしらえたこの召食事あがるものをそつと届けて来ておくれ、よ、後生だよ。私に一目逢おうとつてその位に辛抱遊ばす、それを私の身になつちやあ、ま、どんなだろうとお思いだ。え、後生だからさ、もう、私や居ても、起たつても、居られやしないよ。後生だからさ、ちよつと届けて来ておくれなね。」

伝内はただ頭こしうべを掉ふるのみ。

「何を謂わツしても駄目なこんだ。そりや、は、とても駄目でござる。こんなことがあるうと思わつしやればこそ、旦那様が扶持ふちい着けて、お前めえさま様の番をさして置かつしやるだ。」

お通はいとも切なき声にて、

「さ、さ、そのことは聞えたけれど……ああ、何と云って頼みようもない。一層お前、わ、私の眼を潰つぶしておくれ、そうしたら顔を見る憂きづかい慮いもあるまいから。」

「そりや不可いけねえだ。何でも、は、お前めえさま様に氣を着けて、蚤のみにもささせるなという、おつしやりつくだアもの。眼を潰すなんてあてごともない。飛んだことをいわつしやる。それにしてもお前様眼が見えねえでも、口が利くだ。何でも、はあ、一切、男と逢あわせることと、話はなし談だんをさせることがならねえという、且かつ那樣のおつしやりつくだ。断あきら念めめてしまわつしやい。何と云つても駄目だめでござる。」

お通は胸も張裂くばかり、「ええ。」と叫びて、身を震わし、肩をゆりて、

「イ、一層、殺しておしまいよう。」

伝内は自若として、

「これ、またあんな無理を謂うだ。蚤にも喰くわすことのならねえものを、何として、は、殺せるこんだ。さ駄た々たを捏こねねえでこちらへござれ。ひどい蚊こだがのう。お前様アくわねえか。」

「ええ、蚊がくうどころのことじゃないわね。お前もあんまり因いん業ごうだ、因いん業ごうだ、因いん業ごうだ

「なにその、いわつしやるほど因業でもねえ。この家をめぎしてからに、何遍も探偵が遣つて来るだ。はい、麻畑と謂つてやりや、即座に捕まえられて、吾も、はあ、夜の目も合わさねえで、お前様を見張るにも及ばずかい、御褒美も貰えるだ。ケンどもが、何も旦那様あ、訴人をしろという、いいつけはしなさらねえだから、吾知らねえで、押通しやさ。ソんかわりにやあまた、いいつけられたことはハイ一寸もずらさねえだ。何でも戸外へ出すことはなりましねえ。腕づくでも逢わせねえから、そう思つてくれさつしやい。」

お通はわつと泣出しぬ。

伝内は眉を擧めて、

「あれ、泣かあ。いつもねえことにどうしただ。お前様婚礼の晩床入もしねえでその場ッからこつちへ追出されて、今じや月日も一年越、男猫も抱かないで内にばかり。敷居も跨がすなといういいつけで、吾に眼張とれというこんだから、吾や、お前様の、心が思いやらるるで、見ているが辛いでの、どんなに断ろうと思つたか知ンねえけど、今の旦那様三代めで、代々養なわれた老夫だで、横のものをば縦様にしろと謂われた処で従わなけりやなんねえので、畏つたことは畏つたが、さてお前様がさぞ泣続けるこんだろうと、生命

が縮まるように思つただ。すると案じるより産が安いで、長い間こうやって一所に居るが、お前様の断念あきらめの可いには魂消たまげたね。思いなしか、気のせいか、段々窶やつれるようには見えるけれど、ついで膝も崩した事なし、整然ちやんとして威勢がよくつて、吾、はあ、ひとりで天窓あたまが下るだ、はてここいらは、田舎も田舎だ。どこに居た処で何の楽たのしみもねえ老夫じじいでせえ、つまらねえこつたと思つて、気が滅め入るに、お前様は、えらい女ひとだ。面壁イ九年とやら、悟つたものだ和我があ折つていたんだがさ、葉袋やぐたいもないことが湧わいて来て、お前様ついで見たこともねえ泣かつしやるね。御心中のウ察しねえでもねえけどが、旦那様にやあ、代えられましねえ。はて、お前様のようでもねえ。断念あきらめめてしまわつしやい。どのみちこゝう謂い出したからにやいくら泣いたつてそりや駄目さ。」

しかり親仁おやじのいいたるごとく、お通は今に一年間、幽閉されたるこの孤屋ひとつやに処して、涙に、口に、はた容儀、心中のその痛苦を語りしこと絶えてあらず。修容正肅ほとんど端た尻しすべからざるものありしなり。されど一たび大磐石の根の覆るや、小石の転ぶがごときものにあらず。三昼夜麻畑の中に蟄ちづぶく伏して、一たびその身に会せんため、一粒りゅういの飯いをだに口にせで、かえりて湿虫の餌えはとなれる、意中の人の窮苦には、泰山といえども動かで止やむべき、お通は転倒てんどうしたるなり。

「そんなに解っているのなら、ちよつとの間、大眼おおめに見ておくれ。」

と前後も忘れて身をあせるを、伝内いささかも手を弛ゆるめず、

「はて、肯ききわけ分のねえ、どういふものだね。」

お通は涙にむせいりながら、

「ええ、肯分がなくツても可いよ、お放し、放しなつてば、放しなよう。」

「是非とも肯かなけりや、うぬ、ふん縛つて、動かさねえぞ。」

と伝内は一呵いっかせり。

宜うべしこそ、近藤は、執しゅうじやく着やくの極、婦人おんなをして我に節操を尽さしめんか、終生空閨くうけいを

護らしめ、おのれ一分時もその傍そばにあらずして、なおよく節操を保たしむるにあらざるよ

りは、我に貞なりとはいふことを得ずとなし、はじめよりお通の我を嫌うこと、蛇蝎だかつもた

だならざるを知りながら、あたかも渠かれに魅入みいりたらんごとく、進退すすき隙なく附絡つきまといて、遂に

お通と謙三郎とが既に成立せる恋を破りて、おのれ犠いけにえ牲を得たりしにもかかわらず、従い

兄妹とこ同士が恋愛のいかに強きかを知れるより、嫉妬しつとのあまり、奸淫かんいんの念を節し、当初婚

姻よの夜よりして、衾ふすまをとものにせざるのみならず、一たびも来りてその妻を見しことあらざ

る、孤屋ひとつやに幽閉の番人として、この老夫おやじをば扱えらびたれ。お通は止やむなく死力を出して、

瞬時伝内とすまいしが、風にも堪えざるかよわき婦人の、憂にやせたる身をもって、いかで健腕に敵し得べき。

手もなく奥に引立てられて、そのままそこに押据えられつ。

たといいかなる手段にても到底この老夫をして我に忠ならしむることのあたわざるをお通は断じつ。激昂の反動は太く渠をして落胆せしめて、お通は張もなく崩折れつつ、といきをつきて、悲しげに、

「老夫や、世話を焼かすねえ。堪忍しておくれ、よう、老夫や。」

と身を持余せるかのごとく、肱を枕に寝僵れたる、身体は綿とぞ思われける。

伝内はこの一言を聞くと斉しく、窶める両眼に涙を浮べ、一座退りて手をこまぬき、拳を握りてものいわず。鐘声遠く夜は更けたり。万籟天地声なき時、門の戸を幽に叩きて、

「通ちゃん、通ちゃん。」

と二声呼ぶ。

お通はその声を聞くや否や、弾械のごとく飛起きて、屹と片膝を立てたりしが、伝内の眼に遮られて、答うることを得せざりき。

戸外にては言途絶え、内を窺う氣勢なりしが、

「通ちゃん、これだけにしても、逢わせないから、所詮あかないとあきらめるが……」

呼吸も絶げに途絶え途絶え、隙間を洩れて聞ゆるにぞ、お通は居坐直整えて、畳に両手を支えつつ、行儀正しく聞きいたる、背打ふるえ、髪ゆらぎぬ。

「実はね、叔母さんが、謂うから、仕方がないように、いつていたけれど、逢いたくツて、実はね、私が。」

といいかかれる時、犬二三頭高く吠えて、謙三郎を囲めるならんか、叱ッ叱ッと追うが聞えつ。

更に低まりたる音調の、風なき夜半に弱々しく、

「実はね、叔母さんに無理を謂つて、逢わねばならないようにしてもらいたかつた。だからね、私にどんなことがあるうとも叔母さんが気にかけないように。」

と謂う折しも凄まじく大戸にぶつかる音あり。

「あ、痛。」

と謙三郎の叫びたるは、足や咬まれし、手やかけられし、犬の毒牙にかかれるならずや。あとは過ぎれてことばなきに、お通はあるにもあられぬ思い、思わず起つて駈出ですが、

肩肱いかめしく構えたる、伝内を一目見て、蒼くなりて立竦みぬ。

これを見、彼を聞きたりし、伝内は何かしけむ、つと身を起して土間に下立ち、ハヤ懸金に手を懸けつ。

「ええ、た、た、たまらねえたまらねえ、一か八かだ、逢わせてやれ。」

とがたりと大戸引開けたる、トタンに犬あり、颯と退きつ。

懸寄るお通を伝内は身をもて謙三郎にへだてつつ、謙三郎のよろめきながら内に入らんとあせるを遮り、

「うんや、そうやすやすとは入れねえだ。旦那様のいいつけで三原伝内が番する間は、敷居も跨がすこつちやあねえ。断て入るなら吾を殺せ。さあ、すつぱりとえぐらつしやい。ええ、何を愚図々々、もうお前様方のように思い詰りや、これ、人一人殺されねえことあねえ筈だ。吾、はあ、自分で腹あ突いちやあ、旦那様に済まねえだ。済まねえだから、死なねえだ、死なねえうちは邪魔アするだ。この邪魔物を殺さつしやい、七十になる老夫だ。殺し惜くもねえでないか。さあ、やらつしやい。ええ！ 埒のあかぬ。」

と両手に襟を押開けて、仰様に咽喉仏を示したるを、謙三郎はまたたきもせで、やしばらく瞞めたるが、銃剣一閃し、暗を切つて、

「許せ！」

という声もろとも、咽喉のんどに白刃しらばを刺されしまま、伝内はハタと僵たおれぬ。

同時に内に入らんとせし、謙三郎は敷居につまずき、土間に両手をつきざまに俯伏うつぶしになりて起きも上らず。お通はあたかも狂気のごとく、謙三郎に取とり縋すがりて、

「謙さん、謙さん、私や、私や、顔が見たかった。」

と肩に手を懸け膝に抱いだける、折から靴音、劍摩ひびきの響。五六名どやどやと入いり来きたりて、正体もなき謙三郎をお通の手より奪い取りて、有無を謂ひわせず引立ひつるに、啊あな呀やとばかり跳は起ねきたるまま、茫然として立ちたるお通の、齒をくいしばり、瞳を据えて、よろよろと僵たお

れかかれる、肩を支えて、腕を掴つかみて、

「汝うぬ、どうするか、見ろ、太い奴だ。」

これ婚姻の当夜以来、お通がいまだ一たびも聞かざりし鬱うつし怒いかれる良人の声なり。

四

出征に際して脱營せしと、人を殺せし罪とをもて、勿論謙三郎は銃殺されたり。

謙三郎の死したる後も、清川の家における居馴れし八畳の渠が書齋は、依然として旧態を更めざりき。

秋の末にもなりたれば、籐筵に代うるに秋野の錦を浮織にせる、花毛氈をもつてして、いと華々しく敷詰めたり。

床なる花瓶の花も萎まず、西向の櫃子の下なりし机の上も片づきて、硯の蓋に塵もおかず、座蒲団を前に敷き、傍なる桐火桶に烏金の火箸を添えて、と見ればなかに炭火も活けつ。

紫たんの角の茶盆の上には幾個の茶碗を俯伏せて、菓子を装りたる皿をも置けり。

机の上には一葉の、謙三郎の写真を祭り、あたりの襖を閉切りたれば、さらでも秋の暮なるに、一室森とほのあかるく四隅はようよう暗くなりて、ものの音さえ聞えざるに、火鉢に懸けたる鉄瓶の湯気のみ薄く立のぼりて、湯の沸る音静なり。折から彼方より襖を明けつ。一脈の風の襲入りて、立昇る湯気の靡くと同時に、陰々たるこの書齋をば真白き顔の覗きしが、

「謙さん。」

と呼び懸けつ。裳すらすら入りざま、ぴたと襖を立籠めて、室の中央に進み寄り、愁

然として四辺を眇し、坐りもやらず、頤を襟に埋みて悄然たる、お通の倅寡れたり。やがて桐火桶の前に坐して、亡き人の蒲団を避けつつ、その傍に崩折れぬ。

「謙さん。」

とまた低声に呼びて、もの驚きをしたらんごとく、肩をすぼめて首低れつ。鉄瓶にそと手を触れて、

「おお、よく沸いてるね。」

と茶盆に眼を着け、その蓋を取のけ、冷かなる吸子の中を差覗き、打悄れたる風情にて、

「貴下、お茶でも入れましようか。」

と写真を、じつと瞻りしが、はらはらと涙を溢して、その後はまたものいわず、深き思に沈みけむ、身動きだにもなさざりき。

落葉さらりと障子を撫でて、夜はようやく迫りつつ、あるかなきかのお通の姿も黄昏の色に蔽われつ。炭火のじょうの動く時、いかにしてか聞えつらむ。

「ツウチャン。」

とお通を呼べり。

再び、

「ツウチャン。」

とお通を呼べり。お通は黙想の夢より覚めて、声する方を屹かたと仰ぎぬ。

「ツウチャン。」

とまた繰返せり。お通はうかうかと立たちあ起りて、一步を進め、二歩を行ゆき、椽側に出で、庭に下り、開け忘れてたりし裏の非常口よりふらふらと立出でて、いずこともなく歩み去りぬ。

かくて幾分時のその間、足のままに徜徉さまよえりし、お通はふと心着きて、

「おや、どこへ来たんだらうね。」

とその身みずからを怪あやしみたる、お通は見るより色を変えぬ。

ここぞ陸軍の所轄に属する埋葬地あたりの辺なりける。

銃殺されし謙三郎もまた葬られてここにあり。

かの夜よ、お通は機会を得て、一たび謙三郎と相抱き、互に顔をも見ざりしに、意中の人よは捕縛されつ。

その時既に精神的絶え果つべかりし玉の緒を、医療の手にて取留められ、活いくるともな

く、死すにもあらで、やや二ヶ月を過ぎつる後、一日重隆のお通を強いて、ともに近郊に散策しつ。

小高き丘に上りしほどに、ふと足下に平地ありて広袤一円十町余、その一端には新しき十字架ありて建てるを見たり。

お通は見る眼も浅ましきに、良人は予め用意やしけむ、従卒に持つて来させし、床几をそこに押並べて、あえてお通を抑留して、見る目を避くるを許さざりき。

武歩たちまち丘下に起りて、一中隊の兵員あり。樺色の囚徒の服着たる一個の縄附を挟みて眼界近くなりけるにぞ、お通は心から見るともなしに、ふとその囚徒を見るや否や、座右の良人を流眄に懸けつ。かつて「どうするか見ろ」と良人がいいし、それは、すなわちこれなりしよ。お通は十字架を一目見てしだに、なおおつ震いおのける先の状には引変えて、見る見る囚徒が面縛され、射手の第一、第二弾、第三射撃の響とともに、囚徒が固く食いしぼれる唇を洩る鮮血の、細く、長くその胸間に垂れたるまで、お通は瞬もせず瞻りながら、手も動かさず態も崩さず、石に化したるもののごとく、一筋二筋頬にかかれる、後毛だにも動かさざりし。

銃殺全く執行されて、硝煙の香の失せたるまで、尉官は始終お通の挙動に細かく注

目したりけるが、心地好よげに髻ひげを捻ひねりて、

「勝手に節操を破つてみる。」

と片頬に微笑を含みてき。お通はその時蒼あおくなりて、

「もう、破ろうにも破られませんか。しかし死、死ぬことは何時なんどきでも。」

尉官はこれを聞きもあえず、

「馬鹿。」

と激しくいいすくめつ。お通の首うなじの低たるるを見て、

「従卒、家うちまで送つてやれ。」

命ぜられたる従卒は、お通がみずから促うながしたるまで、恐れて起たつことをだに得えせざりしなり。

かくてその日の悲劇は終りつ。

お通は家に歸りてより言行ほとんど平時つねのごとく、あるいは泣き、あるいは怨じて、尉官近藤の夫人たる、風采ふうさいと態度とを失うことをなさざりき。

しかりし後のち、いまだかつて許されざりし里さと 歸かえりを許されて、お通は実家に歸りしが、母の膝下ひざかに来きたるとともに、張詰めし氣の弛ゆるみけむ、渠かれはあどけなきものとなりて、泣くも

笑うも嬰兒のごとく、ものぐるおしき体なるより、一日のばしにいいのばしつ。母は女を重隆の許に返さずして、一月余を過してき。

されば世に亡き謙三郎の、今も書斎に在すがごとく、且つ掃き、且つ拭い、机を並べ、花を活け、茶を煎じ、菓子を挟むも、みなこれお通が堪えやらず忍びがたなき追慕の念の、その一端をもらせるなる。母は女の心を察して、その挙動のほとんど狂者のごときにもかかわらず、制し、且つ禁ずることを得ざりしなり。

五

お通は琵琶ぞと思ひしなる、名を呼ぶ声にさまよい出でて、思わず謙三郎の墳墓なる埋葬地の間近に來り、心着けば土饅頭のいまだ新らしく見ゆるにぞ、激しく往時を追懐して、無念、愛惜、絶望、悲惨、そのひとつだもなおよく人を殺すに足る、いろいろの感情に胸をうたれつ。就中重隆が執念き復讐の企にて、意中の人の銃殺さるるを、目前我身に見せしめ、当時の無念禁ずるあたわず。婦人の意地と、張とのために、勉めて忍びし鬱憤の、幾十倍の勢をもつて今満身の血を舂るにぞ、面は蒼ざめ紅の唇白歯にく

いしばりて、ほとんどその身を忘るる折から、見遣る彼方の薄原より丈高き人物頭れたり。

潤歩埋葬地の間をよぎりて、ふと立停ると見えけるが、つかつかと歩をうつして、謙三郎の墓に達り、足をあげてハタと蹴り、カッパと唾をはきかけたる、傍若無人の振舞の手に取るごとく見ゆるにぞ、意気激昂して煙りも立たんず、お通はいかで堪うべき。

駈寄る婦人の蹙音に、かの人物は振り返りぬ。これぞ近藤重隆なりける。

渠は旅団の留守なりし、いま山狩の帰途なり。ハタと面を合せる時、相隔ること三十歩、お通がその時の形相はいかに凄まじきものなりしぞ尉官は思わず絶叫して、

「殺す！ 吾を、殺す※」

というよりはやく、弾装したる猟銃を、戦きながら差向けつ。

矢や銃弾も中らばこそ、轟然一射、銃声の、雲を破りて響くと同時に、尉官は苦と叫ぶと見えし、お通が鬚を両手に掴みて、両々動かざるもの十分時、ひとしく地上に重り伏せしが、一束の黒髪はそのまま遂に起たざりし、尉官が両の手に残りて、ひよろひよると立上れる、お通の口は喰破れる良人の咽喉の血に染めり。渠はその血を拭わんともせで、一足、二足、三足ばかり、謙三郎の墓に居寄りつつ、裏がれたる声いと細く、

「謙さん。」

といえるがまま、がツくり横に僵たおれたり。

月青く、山黒く、白きものあり、空を飛びて、傍かたえの枝に羽音を留とどめつ。葉を吹く風の音ねにつれて、

「ツウチャン、ツウチャン、ツウチャン。」

と二たび三たび、飮くだまを返して、琵琶はしきりに名を呼べり。琵琶はしきりに名を呼べり。

明治二十九（一八九六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和51）年3月26日発行

初出：「国民之友」

1896（明治29）年1月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年7月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

琵琶伝

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>